

脊 髄 ま ひ 家庭療護の手引き

サンタクララバレー医療センター 編著

斎 藤 篤 編訳

医学博士

欧米の主要な脊髄損傷専門病院やリハビリテーションセンター、またそれぞれの国の脊損協会などでは、脊髄麻痺者のために、退院後の健康管理のための手引書を数多く発行している。何れもイラスト入りで、医学的知識のない人々にも分かるように、平易に書かれているものが多い。

私共も欧米のガイドブックを入手するたびに、わが国でも脊髄麻痺者の家庭療護のための手引書の必要性を何時も痛感していたのである。日本パラプレジア医学会でも、1昨年この事が話題となり、急いで簡単な脊髄損傷者のための手引書を作製し、頒布されているのである。これはB 6版と小さく、僅か44頁で、私共のセンターでもすでに開院以来2

年間に200部を退院者や家族の希望者に頒布して来たが、このような簡単なものでも、大変好評で、すでに残部がなくなって来た。

脊髄麻痺者には、退院してからも一生自己管理を必要とし、そのリハビリテーションは自己管理の技術の習得であるともいえるのである。このためにいかに脊髄麻痺者や家族がこのような手引書を必要としているか、よく分かるのである。

丁度時宜よく、斎藤篤博士が米国で配布され活用されている、脊髄まひ、家庭療護の手引きを翻訳されたのみならず、わが国で直ちに役に立つように、実際の細かい配慮のもとに加筆され、分かりやすく記述されたホームケアマニュアルとして出

総合脊損センター

赤 津 隆

版された。

一読して、私共がかねがね考えていた理想のガイドブックであると思われる。脊髄麻痺者や家族のための必要な知識と手技が網羅しており、わが国の実状に則した資料をくまなく紹介するよう意図していることは、真に脊髄麻痺者の身になって書かれたものと思う。

また本書は、多くのパラメディカルの人々にとっても、脊髄麻痺のためとまどっている人々を指導し、説明するため、座右におくべき良書である、活用をお薦めしたい。

(B 5版, 150頁, 1981, ¥3,800,
協同医書出版社 発行)